

プレイスメントテストと聴解力

桜田千采

新来の留学生に対してプレイスメントテストを実施しクラス分けを行っているが、聴解力テストをどのように行うのがよいのか考えてみたい。

この調査の目的の一つは、各クラスの実情とその相関性を調べること、もう一つは金沢大学の留学生の日本語補講クラスの状況に適した聴解力のテストとはどのようなものであるかを探ることである。

(1) 調査方法と被験者

次のような方法で行った。

- 1) 発音練習に使うミニマルペアを聴かせ、自分が聞こえたものにマルをつける。問題は『発音と音声教育』（文化庁）（P.204～P.208）から選んだ。
- 2) 書き取り問題で、文章を聞いて空いている所を埋める穴埋め（2-1, 2-2）と、文章をそのまま書き写すもの（2-3）。問題は筆者の作ったもの。
- 3) 男女二人の会話を聞かせ、一つは会話の授受表現を理解し動作の主体を選ぶもの（3-1）、他の一つは会話の意味を理解しているかどうかを問うもの（3-2）。問題は『日本語総まとめ問題集—日本語能力試験対策「聴解編」』（アスク講談社）（P.10, P.12, P.13）による。

1), 2) は筆者自身が録音したものを; 3) は既成のテープを使った。

初級クラスは三回聞かせたが、上級になるにつれ、繰り返し聞きたくないということでわかりにくい所だけ繰り返すなどかなり恣意的なやり方になった。

被験者は初級Ⅰクラス 5（来日後3か月未満）

初級Ⅱクラス 14

中級Ⅰクラス 11

中級Ⅱクラス 8

上級クラス 12 計 50名

1) は全員、2) は2-2まで全員、2-3は初級Ⅱ以上のクラス、3) は中級Ⅰ以上のクラスで実施した。

(2) 調査内容とその結果

- 1) については、1—長音と短音（EX. おばさん おばあさん）

2一撥音（両唇音の前）（EX. こぶ こんぶ） 3一撥音（歯茎音の前）（EX. きたろう きんたろう） 4一撥音（軟口蓋音の前）（EX. こげつ こんげつ） 5一撥音（母音の前）（EX. かなん かんあん）

6一促音（閉鎖音の前）（EX. こきょう こっきょう） 7一促音（摩擦音の前）（EX. かせき かつせき）

8一拗音と直音（〈「イ」で終わる音節+母音〉と〈拗音節〉と〈「イ」で終わる音節+拗音節〉の違い）（EX. びおういん びょういん びょういん）

9一無声閉鎖音と有声閉鎖音（語中）（EX. はとめ はどめ）

それぞれについて5問ずつ計45問の誤答率は以下の通り

数字が低いので、やや実効性に欠けるが、分かり易さを優先させて%で表した。以下同じ。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
初級Ⅰ	12	4	8	0	4	16	12	64	40
初級Ⅱ	11.4	2.8	0	2.8	10	12.8	8.5	31.4	32.8
中級Ⅰ	10	2	0	2	10	12	0	24	32
中級Ⅱ	5	0	0	0	2.5	0	0	27.5	42.5
上級	6.6	1.6	0	0	3.3	10	8.3	25	30
全体	8.9	2.0	0.8	1.3	6.5	10.2	5.7	31.0	34.2

この結果を見る限り必ずしもクラスが上級になれば、音の聞き取り能力が高くなるというものではない。その原因は上級者が初めから日本で日本語を勉強したわけではないということである。従って中には、来日後の期間が短くまだ日本語の音そのものに慣れていない者もおり、また十分に音声教育を受けるチャンスがなかった独習者もいる。音の聞き取り能力の低い者は当然発音も悪く意志の疎通に障害を生じる。従って上級者にも随時発音矯正その他の音声教育が必要である。

母語別に見ると、8は母語に関係なく全体に成績が悪く、9は中国語を母語にする者が悪かった。9については耳が悪いというよりむしろ敏感なために間違うとも言えるので、息が出ているかどうかで聞き分けるための間違いである。息の有無ではなく、有声か無声かで区別するのだということ徹底させれば、かなり聞き取りやすくなるのではないか。

1) 全体では、母語による優劣より成績の悪い者が全体に悪いという傾向が見られた。

2) について、2-1は主として語のレベルのもの、2-2は連体修飾語や述部全体を少し長く書かせる問題である。問題は以下の通り。

2-1

①これはほんです。②そのほんはだれのですか。わたしのです。

③いま、なんじですか。9じ15ふんです。

④でんわばんごうはなんばんですか。69の4871です。

⑤これはえんぴつではありません。まんねんひつです。

2-2

- ① ほんはどこにありますか。つくえのうえにあります。
 ② いえのまえにいる人はラーさんです。そのよこにあるのはおおきいほこです。
 ③ はこのなかにはテレビがあります。 ④ きょうラーさんはこのテレビをかってきました。
 ⑤ かったテレビをじてんしゃでうちまでもってきたのです。

空所を埋める問題で間違いが目立ったのは、電話番号を聞き取る問題である。「69の4871」の表記の間違い「609」「6109」などを書いたもの、また「の」があるにも係わらず「6-9417」とか「6104の一」と局番と電話番号を混同したもの、数字の「8」と「1」を間違えたものが、26例と約10%あった。上級でも6例ある（すべて数字を一字間違えただけではあるが、現実の問題として一字でも間違えば電話は通じない）など、初級レベルの学習事項だと思っていたが、定着率が意外に悪い。

次に目立ったのは文の前部にある連体修飾句の間違いが多いということである。始めに聞いたところを忘れてしまうのか、文の主意を聞き取ろうとすると、他の部分を聞き洩らすのか、これだけでは結論がでない。空所を埋める問題でも、「ほんはどこにありますか」「つくえのうえにあります」がほとんど間違いがないのに対して（主な間違いは「つくえ」の表記の間違い5例）、「いえのまえにいる人はラーさんです」の「いる」が抜けたもの（語の間違いではなく）が、初級で12例、中級でも3例あったこと、また「そのよこにあるのはおおきいほこです」の「あるのは」のどれか一語でも抜けているのは、初級で11例、中級以上でも4例あったということである。

次に語尾の空所を埋めるのにも、条件によって、難易度がかなり左右されるということがわかった。2-2③「はこのなかにはテレビがあります」④「きょうラーさんはこのテレビをかってきました」⑤「かったテレビをじてんしゃでうちまでもってきたのです」

この三つの文を比べてみると、③では、「が」が抜けたものが1例だけ、④では、「を」が抜けたものが4例、「きました」が別の語になっていたものが3例であった。それに対して⑤では「うちまでもってきたのです」が抜けたもの6例、「もってきたのです」は1例、「きたのです」2例、全て初級であるが、「のです」の抜けたものは、初級1例、中級以上6例あった。これは、③は4語、④は7語、⑤は9語と語数がやや多いこと、また核になる語が「じてんしゃ」であり、「テレビ」に比較すると、複雑だということ、「うちまで」という節が余計に含まれていること、述部も「あります」「かってきました」に対して、「もってきたのです」と「の」で受ける文になっていること、などが原因であろう。ひとつひとつはたいしたことがないようだが、これらが一度に重なると、かなりの負担になることがわかる。

全体を語のレベルに分け、一語一語について間違いか、その語が抜けていれば誤答とし全体の語数に人数をかけたものを分母とし誤答数を分子として%で表したものが下の表である。

	初級Ⅰ	初級Ⅱ	中級Ⅰ	中級Ⅱ	上級
2-1	16.5	16.1	8.6	4.3	3.9
2-2	30.7	25.2	9.9	4.5	4.0

2-3については、レベルが到達していないと思われたので初級Ⅰを除いて調べた。

書き取るべき文は次の5問である。

- ①学生の時／よくスキーに行きましたが／いまはあまり行きません。
- ②このラジカセは／ちょっと高いですが／かたいです。
- ③旅行に行くんですが／病気になるかもしれないので／薬を持って行くんです。
- ④友だちと野球を見に行くと／言っていましたから／弟は来ないと思います。
- ⑤ツアーコンダクターというのは／国家試験を受けて／資格を取る必要があります。

一回通して読んで、つぎは／（ポーズ）の所で切って読んだ。読む速度はあまり遅くなく、ポーズの所では充分時間をとった。書く時は、すべて片仮名と平仮名を使った。（表の見方は従前による）

	①	②	③	④	⑤	平均
初級Ⅱ	20.4	19.2	52.6	46.7	84.3	44.6
中級Ⅰ	12.7	10	16.9	30	55.1	24.9
中級Ⅱ	3.3	7.5	5.9	8.7	21.0	8.1
上 級	3.8	7.5	9.6	17.0	25.5	12.6

上の表からもわかるように、このレベルになると、初級Ⅱと中級Ⅰ、中級Ⅰと中級Ⅱの間に大きな差があり、中級Ⅱと上級とのあいだには全く差がない。

しかし、この問題は初級Ⅱにとっては①②以外は、難し過ぎると言えよう。③から抜けている所が目立ち始め、⑤に至ってはほとんど書けていない。どこで書けなくなるか、ルールがあるようである。③なら、「病気」という単語から書けなくなり、「薬」という単語の後でやや持ち直す。④なら、「野球」という単語で書けなくなり、「弟」という単語で持ち直す。⑤では、「ツアーコンダクター」という単語でつまずいて「国家試験」も「資格」も分からない単語なので最後まで書けないままで終わってしまう。最後の「あります」だけ5例が申し訳のように書いている。つまり、ポーズの後の単語が知っている単語ならスムーズに書くことができ、知らなかったり表記が難しかったりするとそこでストップして進めなくなる、ということである。中級Ⅰも③では目立たないが、④や⑤では初級Ⅱほどではないが、同じように難しい単語の所から書けなくなる傾向を示している。それが中級Ⅱになると、抜けている所はほとんどなくなる。「ツアーコンダクター」という単語が分かった者は全体で3名しかいないのだが、上級になるに従ってその語が分からなくても、他の所を抜かすことなく書くことができるようになる。

単語レベルで間違いの多いものは以下の通り。

	初級Ⅱ		中級Ⅰ		中級Ⅱ		上級		ミスは誤記
	ミス	×	ミス	×	ミス	ミス	×		
スキー	9	2	8		3	4	1		
ラジカセ	11		7		3	4		×はその語が	
ツアーコンダクター	9	5	11		6	11		抜けたもの	
旅行	10		3		3	3			
ちょっと	10		2		2	2			
病気	3	5	0		2	2			
野球	9		4		0	0			
国家	8	6	5	1	3	4			
試験	4	6	5		3	2			
資格	3	11	4	5	5	3	3		

初級Ⅱや中級Ⅰは、長音、拗音、促音などが間違いの条件になっているが、中級Ⅱや上級においては、外来語の誤記率が高い。初級段階では、聴力表記力ともに不十分であるのに対し、上級段階では日常語の聴力表記力には問題はないが、外来語に関しては上級になっても表記が難しいということである。

3) について

3-1 次のような会話を聞かせ () の中から動作の主格を選ぶ。

田中(女声) 「リーさんに読んでもらってください」

ヤン(女声) 「はい、そうします」

(①田中さん ②ヤンさん ③リーさん) が 読みます。答え③

正答率の一番高かったのは上の問題で90%、低かったのは「リーさんに買ってくれた」というものの(20%)、「お金を借りてあげた」という状況がわかりにくいもの(27%)、「リーさんに本を貸してもらったんですか」(40%)などがあった。

この問題における誤答率は以下のとおり。

中級Ⅰ 53.5% 中級Ⅱ 40.0% 上級 30.0%

授受表現だけでなく、他の文法事項も組入れた問題にした方が全体的な能力を見ることができたのではないかと反省している。

3-2 はやはり会話或は会話の始めの発言を聞かせて、その会話の言い回しやその先を予測させるものである。

例えば、「あー疲れた。この荷物重いね。」「あ、そこに置かないでくれない。」という会話を聞かせて「そこに置いて下さい」なのか「そこに置かないで下さい」なのかを選ばせる。この問題も正

答率は5割ちょっとで、あまりよくない。二重否定が難しかったのだろう。正答率が5割以下のものは次のとおり。()内は正答率

「この問題できますか」「こんなのわけないですよ」(48.3%)、これは続いて「今日中にこれ全部できますか」「できるわけないでしょう」(71.0%)という会話があるので、両方「わけない」という語があって混乱したらしい。「これおすそわけです」「それはそれは」の「それはそれは」が「ありがとうございます」か「ご苦労さま」か選ぶ問題(35.4%)や「お客さま、この机なんかいかがでしょう」「うちのような狭い所にはもってこいだね」というのは「いい」と言っているのか、「よくない」と言っているのか考えさせる問題(25.8%)では、「おすそわけ」「もってこい」などの語が分からなければ答えられない。

会話の先を予想させる問題で、「頑張ってみたところで……」のつぎの会話は「うまくいくでしょうね」なのか、「うまくいかないでしょうね」なのか選ばせる問題も(35.4%)正答率は低い。これも「したところで」は述部に否定がくるということ、「頑張ってみたところ」とは違うということをしかり知識として知っていなければ出来ない。

3-2の各クラスの誤答率は以下のとおり。

中級Ⅰ 38.2% 中級Ⅱ 40.7% 上級 27.1%

(3) 分析とプレイスメントテストへの応用

1)の結果として音の聞き分け能力は、必ずしも日本語能力に比例しているとは限らないことがわかった。上級者の中にも音の聞き分け能力の落ちる者があり、従って、上級クラスでも普通の授業の中で訓練する必要があるということである。プレイスメントテストとしては、クラスに分ける能力とは別のところで結果が出てしまうという点で、適切とは言えない。

2)については、空所を埋める問題でも、小さいことが結果を左右するのであるから、充分そのことを考慮して学生に余分な負担を強くないように問題を作る必要がある。

ここで使った問題なら、2-1、2-2まで、初級と中級を分けることができ、2-3で、中級Ⅰと中級Ⅱを分けることはできるが、初級Ⅰと初級Ⅱ、中級Ⅱと上級を分けることは難しい。従って、書き取りでクラスを分けるためには語彙、文脈など一層の工夫をすべきであろう。初級Ⅰと初級Ⅱを分けるためには、書き取りは有効だと考えられるが、中級Ⅱと上級を分けるにはあまり有効とは思えない。聞き取る能力には違いがないからである。従ってもう少し高度の応用力を見るようなテスト形式を導入すべきであろう。

3)については、3-1ではクラスと成績が一致しているが、中級Ⅰの誤答率が5割以上もあり、中級Ⅰには適切ではない。文法事項としては全て初級の学習事項であるが、決してやさしい項目ではない。従って中級であってもこれを聴解テストの問題にすると、ペーパーテストと違って回答するための時間も短く、瞬間的な判断力が要求されるので、やはり難しいのであろう。聴解テストではその点をよく考慮しなければならない。

3-2は、日本語にどの位慣れているか、その語を知っているかどうかによって成績が左右されるといえよう。そしてこれらの語が日本語を学ぶ者が誰でも知っている必要があるかどうか、会話の綾とでも言うべきことを知識として持つ必要があるかどうかという点になるとやや疑問がある。勿論中には必要な学習事項もあるが、このようなことを限られた時間の中で知識として習得する前に学ぶべきことがあるのではないか。日本人の中で生活するうちに覚えるならともかく、大学や大学院で限られた時間内で勉強する者にとってはなおさら必要かどうか疑問が残る。この問題は日本語能力検定試験のための問題集からとったのであるが、日本の大学を受験する留学生にとっては日本語能力検定試験は避けて通れない試験である。その試験でこのような問題が出題されているというのは受験生の負担の上からも、入学後の必要度からも適切ではないといえよう。

ところで、結果から分かるように中級Ⅱにとって、難しさを強く感じた問題であった。上級クラスはやや成績がよかったが、中級Ⅰと中級Ⅱは成績がわずかではあるが、逆転している。これは中級Ⅱが書き取りで上級より成績がよかったことを考えると、どちらの問題が正しく日本語の能力を測定しているか疑問である。従って金沢大学の日本語補講のためのプレイスメントテストとしては一考を要する。

(4) 結 論

ここで使った問題は、初級者と上級者にそれぞれ適切でありかつ段階的に成績が出るもの、さらに音声面、聴力面、文法、語彙その他の運用力を見ることを考慮したものであった。しかし、中には結果を見て適切とは言えないものもあった。

またこの結果からみると、現在のクラスでは中級Ⅱと上級の差がはっきりしているかどうかやや疑問がある。

これからも中級Ⅱと上級にクラスを分けるなら、プレイスメントテストの方法を工夫すべきであろう。現在はペーパーテストは初級Ⅰと初級Ⅱ、あとは中級以上の三種だけで、聴解テストも二種だけである。しかもプレイスメントテストでクラスを分けるのは新来の留学生だけで、従来の学生は自動的にクラスが進むことになっている。また、学生個人の希望がかなり優先され、教師のほうは一ランク下のクラスが適当だと思っても、学生が強く希望すれば、望むクラスで授業を受けさせてきた。学生は大体実力より上のクラスを希望することが多く、従って上級クラスほど人数が増加する傾向が見られた。今までのように人数が少ない場合はこれでもよかったが、学生数も増加し、クラスによっては授業も難しいということになれば、やはりもう一度プレイスメントテストならびにクラス分けの方法について一考を要するであろう。しかし、これは日本語の補講そのものがどこまで留学生の日本語学習にかかわるかということとも関連することで、簡単に結論の出ることではないが、よりよいプレイスメントテストとはどんなものであるか、考察を続けたい。